

講義⑤

「まちづくりの拠点としての図書館」

講師：全国生涯学習まちづくり協会
理事長・聖徳大学名誉教授 福留強

1 はじめに

以前、宮城県気仙沼市を訪れた際に「図書館へ行く道をきいている、あのおじさんはきっと好人にちがいない！」と書かれた古い石碑と出会った。図書館は良いところだよ、図書館に行く人に悪い人はいないよと道行く子供たちに何げなく教えている。気仙沼はこういうまちなのかと大変感動した記憶がある。

今の日本には高齢化社会、認知症、空き資源活用、国際化など様々な課題がある。今後、図書館はこういった課題とどう関わっていくかを考えなくてはいけない。今日の講義のテーマはまちづくり・コミュニティであるが、観光についても、皆様に関心をもっていただければと思う。

2 まちづくりの目標と生涯学習

生涯学習と聞くと定年した後に勉強することだと思われているが、生涯学習とは学校教育も家庭教育も全部含めて、自分を高めることである。それから余り提唱されていないが、儲けるための生涯学習というものがある。商売をする人なら1円でも多く儲けるために学習すること、農家の人なら1俵でも多くの米をつくること、漁師の人なら1匹でも多く魚を獲ること、そのために工夫することが生涯学習である。つまり生涯学習とは自分を高めることと生活を豊かにすることであり、その中で学び合いつつコミュニティをつくっていく。まちづくりの目標もこれと同じで、市民の生活を豊かにすることと、コミュニティを形成することである。今、コミュニティが壊れていることが課題とされているが、このときに学び合うということが非常に効果的である。交流の場に集まった人たちは学び合いつつ仲間ができて、困ったときにお互い電話をかけあって、相談する可能性がある。これを学び合う縁で「学縁」と言ったり、志で繋がる縁で「志縁」と言ったりする。

こうした縁を繋ぐことは図書館にもできることである。もともと図書館は、「集団学習」に対する「個人学習」のメッカと呼ばれてきた。しかし、図書館は現在、個人学習のメッカではあるが、共同で学び合う場所となりつつある。

これまでの日本の教育では、公民館などの施設があまり活かされていないという反省があった。こういった施設をボランティアやまちづくりに活かすという部分は大分浸透してきた。だが学習成果を幅広く活かすという観点では、キャリアに活かすという部分が足りない。これからは学習成果をキャリアに活かしたり、仕事に活かすことが重要となる。図書館にはありとあらゆる分野の資料や情報が揃っているのだから、生涯学習を支援するための最大の施設と考えられる。

3 図書館がまちづくりの核となる事例

福島県矢祭町に「矢祭もったいない図書館」がある。矢祭町は、国が平成の大合併を推進しようと躍起になっている矢先に、全国に先駆けて「市町村合併をしない」と宣言し、注目された町です。財政状況の厳しい中、町民の要望が一番多かった図書館の施設を真っ先につくったが、本がないので、全国に本を寄贈を呼びかけた。寄贈図書による図書館という大胆な発想は、図書館関係者から猛烈な批判を受けたが、2007年にはLibrary of the Yearの最終選考対象館に選ばれるほどの図書館となった。

所蔵資料は5万冊あれば良いと考えていたが、全国から48万冊もの本が集まった。当初は集まった本の整理の仕方がわからず、本のタイトルを50音順に並べていたが、司書資格を持つボランティアが加わり、今は綺麗に整理されている。また、矢祭町の図書館には「矢祭子ども司書」という制度があり、町がつくったカリキュラムの単位を取得し、修了レポートを書けば「子ども司書」として認定される。小さい頃から本に、そして図書館に触れさせようという試みで、その取組は全国に広がっている。

今、矢祭町で一番人気の場所と言ったら図書館であり、観光客が一番多く行く場所となっている。

4 まちづくりに生かされる図書館事業

これからは観光と図書館が結びつく必要がある。ブックツーリズムという言葉があり、「本と巡り合う、本に出てくる場所を巡る」といった意味合いがある。これからは図書館＝観光地になり、図書館が観光の拠点になりうる。そこで、観光への取り組みとして次のような手順を提案したい。探す・調べる・推理する・整理する・創造する、この頭文字をとって「さしすせそ」である。まずは、このまちの取り柄は何なのか、地域資料を「探す」。そして、学校教育でよく見る「調べる・推理する・整理する」は、全て図書館でもできるし、むしろ図書館が一番ふさわしい場所ではないだろうか。では、これでも分からなければどうするか、「創造する」、見当たらなければつくってしまえば良いということだ。このように図書館は観光学習の要となる。

またエコミュージアム構想というものがある。建物の中に資料を閉じ込めるのではなく、外にも資料がある。野外博物館のようなイメージで、私はまるごと博物館、まち全体博物館と呼んでいる。まち全体が博物館という発想であり、あるべきところにある資源が本物だろう、という考えである。サテライトが地域のあちらこちらにある。そのサテライトのひとつに図書館があってもいい。また、まち全体が博物館だということは、住民はお客様であると同時に職員である。だから自分のまちの宝を理解していて、守る心掛けもあるし、伝えるということもあるし、発見することもある。住民がお客様を迎える態度がないとできないし、これはまち全体の教育がないとできない。これをエコミュージアムと言うが、日本にはまだ余り事例がない。

5 創年のたまり場

創年とは「積極的に生き、自分を再活性化させようとする前向きな生き方」を主張した言葉である。高齢者を老人と呼ばずに創年と呼び、その人たちがまちで活躍できるような創年市民大学をつくる。みんな年齢も学歴も社会経験も違う中で、まちづくりのために共に学ぶという大学である。創年年齢は実年齢かける7掛けであり、例え

ば60歳の人はまだ42歳となるので、20年分くらい儲かる。その残りの20年をまちのために活かしてほしい、地域のために力を貸してほしいというのが創年の発想である。例えば鹿児島県志布志市では創年市民大学の学生を中心に創年団を結成した。朝晩子供の見守りを続け、創年団ができて3年で志布志警察署管内の事件が3割も減少した。また、創年の集まる場所がないので、創年のたまり場が必要だと考える。以前、私にインタビューをしに来た学生が書いた記事に、「福留教授は全国に1万箇所創年のたまり場を提案し、つくる」と私が言ったと書かれていた。言った覚えはなかったが、確かに創年のたまり場が全国に1万箇所あったら絶対に日本は変わらと思う。地域のお年寄りが集まったり、子供を見守ったり、子供の行く場所になったり、観光の拠点だったり、ボランティアの拠点になったり、読み聞かせをしたり、あるいは体の不自由な人が行ったり。公民館に行けない人たちも、たまり場に行けるはずだ。これは空き家や空き店舗を使えばできると考える。

6 まとめ

学習仲間や活動仲間、主婦の仲間や世代間交流など様々な交流があるが、図書館は交流のメッカになるのではないかと考えている。今までの図書館はそういう発想はなく、本や情報があるというだけだった。しかし、図書館が観光や研究などいろいろなものと結びつくことによって、図書館は交流の中心になるのではないか。そのような図書館のつくりが今後必要となる。交流は資源であり、その交流の場所は図書館だと考える。



(講義中の福留講師)